

「ヴァジラヤーナの一群」に関する試論

——オウム真理教の隠された教団構造について (ver.1.41)

大田俊寛

1. 死刑執行後に明らかになった女性信者殺害事件

事件公表の経緯

2018年7月6日と26日の両日、オウム真理教の教祖であった麻原彰晃氏を始め、一連の事件に関与した一三名の死刑が執行された。これに対する日本社会の反応には、賛意と非難の双方が見られたが、全体としては、肯定的に受け止めるものが大勢を占めていたように思う。他方、2011年に『オウム真理教の精神史——ロマン主義・全体主義・原理主義』（春秋社）という書物を公刊して以降、元オウム信者との対話や宗教学者の責任問題に関与し続けてきた私にとって、当時の心境は、「複雑」という以外に表現しようのないものであった。短期の一斉処刑を肯定的に感じる気持ちにはまったくならなかったが、オウム問題を終結に向かわせるためには、苦しくとも避けられないステップとして受け止めていた。

ところが、オウム問題はその後、順調に終結に向かうというわけにはゆかなかった。死刑執行によって最後の足枷を解かれたかのように、それまでは知られていなかったさまざまな事実が明らかにされたからである。なかでも、信者の一人であった吉田英子氏が教団内で殺害されていたという事実が公表されたことについては、私自身も大きな衝撃を受けた。

事件公表の口火を切ったのは、『週刊新潮』の報道であった。同誌は、新實智光氏が拘留所内で行った告白を足掛かりに調査を進め、同事件に立ち会ったとされる女性幹部や、現在ひかりの輪の代表を務める上祐史浩氏から聞き取りを試みていた。上祐氏は、当初は証言を拒んでいたが、麻原氏の死刑執行二日後の7月8日、同誌に事実を説明した。その内容は、7月11日に発売された『週刊新潮』（7月19日風待月増大号）において記事化されている⁽¹⁾。また、同時期にひかりの輪でも、「週刊新潮報道にある女性信者殺害の目撃に関する事情説明」という文書をネットで公開し⁽²⁾、経緯の説明と上祐氏による謝罪を提示した。

『週刊新潮』の記事の題名が「「上祐」がひた隠し！ 警察も知らない「麻原」の女性信者殺害」というセンセーショナルなものであったことも影響し、事件が明らかにされた直後は、上祐氏に対する批判や非難が社会に溢れかえった。そのなかには、「上祐はやはり嘘つき」「これではオウム事件を本当に反省しているとは言えない」といった反応も見受けられた。

(1) 現在では、「デイリー新潮」のサイトにも掲載されている (<https://www.dailyshincho.jp/article/2018/0719/0557/>)。

(2) ひかりの輪広報のHP。現在は、同年十月に追記を加えた文書が公開されている (<http://hikarinowa.net/public-info/blog/2018/post-63.html>)。

吉田氏が殺害されるに至った経緯は、きわめて理不尽かつ残酷なものであり、それを世間に公表し得るほとんど唯一の立場にあった上祐氏に非難が集中するのは、心情的には無理もないことであった。とはいえ、ゆえに氏がただの「嘘つき」であり、「本当はオウム事件を反省していない」というような先述の世評が、客観的な評価として妥当であるとも私には思えない。上祐氏とひかりの輪は、アレフから脱会した 2007 年以降、オウム事件に対する総括の作業を続け、その成果は「オウムの教訓」というサイトにおいて一般公開されている⁽³⁾。それは私を含め、多くの研究者にとって、オウム事件について考察する際の重要な資料の一つとなった。そして上祐氏は、そうした作業を踏まえた上で、『オウム事件 17 年目の告白』(扶桑社・2012) という著作を公刊し、オウム内での自らの体験・役割・責任について克明に記述している。

また私は、2012 年に『a t プラス』(太田出版) という雑誌の企画で上祐氏と対談して以降、氏やひかりの輪のメンバーと折に触れて意見交換するという形で、事件反省のための交流を続けてきた。それから約七年が経つ現在から振り返っても、そこに何らかの虚偽が含まれていたという事実は、特に見当たらない。ゆえに、上祐氏やひかりの輪によるオウム総括は、基本的に真摯な姿勢で行われていたが、吉田氏の殺害事件に関しては、さまざまな心理的障壁に阻まれて告白することができなかった、と理解するのが妥当であると思われる。上祐氏は『週刊新潮』の記事において、「麻原への信仰が続いているうちは言えませんでした。(アレフを) 脱会した後も恐怖と不安で言えなかった。告白したら自らの危険が及ぶという不安がありました」と発言しているが、私はそれが、氏の率直な心境であったのだらうと受け止めている。

宗形真紀子氏との対話

2018 年 7 月の報道によって女性信者殺害事件の概要を知った私は、ひかりの輪の広報を担当する宗形真紀子氏に連絡を取り、内情の説明を求めた⁽⁴⁾。同事件については、宗形氏自身もまったくの初耳であったとのことで、当初は少なからず心理的に動揺していることが窺われた。

私と宗形氏は、その二ヶ月後に「身心変容技法研究会」という学術的な集いで同席する予定だったこともあり⁽⁵⁾、それから複数回にわたって電話やメールを取り交わし、事件をどう分析し、どう受け止めるべきかについての議論を続けた。オウムという教団に実際に触れたことのない後進の研究者である私にとって、宗形氏の話の内容は大変興味深く、もっぱら聞き手役に回ることになった。そしてそのなかで、教団の内的構造に関する重要な要素をこれまで見落としていたということ、遅ればせながら少しずつ理解していった。

以下の考察は、そうした議論を交わした末に辿り着いた、暫定的な推論である。事件の当事者の大半がすでに死刑執行によって世を去っていることもあり、ここで提示する考察

(3) <http://hikarinowa.net/kyokun/>を参照。

(4) 同氏の経歴については、宗形真紀子『二十歳からの 20 年間——“オウムの青春”という魔境を超えて』(三五館・2010) を参照。

(5) 同研究会の内容は、『身心変容技法研究』第 8 号(2019 年 3 月刊) に収録され、PDF ファイルでも一般公開されている (<http://waza-sophia.la.coocan.jp/>)。

は、もはや明確な裏付けを得られない一つの「仮説」として提示せざるを得ない。また、私はそれによって、オウム事件の責任を特定の人々に押し付けたり、それらの人々の名誉を毀損したりしようとする意図をまったく抱いていない。歴史上にも稀に見る仕方で激しく暴走し、凶悪な犯罪を繰り返したオウム真理教という集団において、秘められた形でのような構造が存在していたのかを探求し、そうした知見が後世への教訓となることを願うのみである。

事件に関する考察

女性信者殺害事件の内容については、先述の『週刊新潮』の記事やひかりの輪のHPに記載されているほか、現在ではウィキペディアの項目も立てられているため⁽⁶⁾、ここでは詳しくは振り返らない。概要のみを押さえておけば、事件が起こったのはおそらく1991年初頭、被害者は吉田英子氏であり、その場に立ち会っていたのは、麻原彰晃、村井秀夫、新實智光、中川智正、経理担当の女性幹部、そして上祐史浩の各氏であった。

殺害の経緯に関して、現在では、新實氏、上祐氏、中川氏による三通りの証言が残されている。新實氏と中川氏の証言は、接見者を介した伝聞情報であるため、正確性にやや不安が残るが、現時点で判明している限りでは、そのあらまは以下の通りとなる。

新實証言……経理を担当していた吉田氏に横領の疑いが掛けられ、麻原氏が「ポア」を決定。新實氏・中川氏が手足を押さえ、麻原氏が自ら首を絞めて殺害した。遺体は護摩壇で焼き、本栖湖に流した。

上祐証言……麻原氏から呼び出しを受け、現場に赴くと、吉田氏が糾弾を受けていた。そして麻原氏が、「白状しないならばポアする」と通告。新實氏が吉田氏の顔を押さえ、中川氏が左腕に薬物を注射して殺害した。遺体はおそらく村井氏によって処理された。

中川証言……吉田氏の足を中川氏が押さえ、新實氏が首を絞めて殺害した。上祐氏は近くでニヤニヤ笑っていた⁽⁷⁾。

三者の証言は、殺害の直接的な行為者が誰であったかという点で微妙な食い違いを見せるが、話の大筋は変わらない。全体の流れとしては、麻原氏が吉田氏の「ポア」を決定し、新實氏と中川氏が実際の殺害に関与し、村井氏が遺体を処理した、と理解しておそらく間違いではないだろう。

事件の経緯を大雑把に見渡すと、教祖と幹部たちが集団で共謀し、財務担当の信者であ

(6)「オウム真理教女性信者殺害事件」の項目を参照 (<https://ja.wikipedia.org/wiki/オウム真理教女性信者殺害事件>)。

(7)中川氏は、『週刊新潮』の取材の時点では、事件の存在を否定していた。しかし2018年11月10日に行われた「オウム真理教対策の学習会」において、接見者の一人は、中川氏が後に上のように証言したと報告し、その内容が、世田谷区議・桃野よしふみ氏のブログ (<http://www.momono-yoshifumi.net/?p=13207>) に掲載された。これに対して上祐氏が、こうした証言は事実と異なり、自分への名誉毀損にも当たると抗議したため、現在では掲載が取り下げられている。

った吉田氏を殺害した、という事件として受け止められる。とはいえ、より詳細に観察すると、事態はそれほど単純ではないことが分かる。注目すべき第一の点は、どの証言に基づいたとしても、現場に立ち会った人々のなかで、上祐氏だけが明らかに何の役割も担っていない、ということである。

上祐氏の話によれば、彼はこの会合に最初から参加していたわけではない。別の作業に従事していたところ、麻原氏から急遽呼び出しを受けたとのことである。そして上祐氏が現場に赴くと、そこではすでに、麻原氏による吉田氏への糾弾が始まっていた。もしかしたら会合の始めには、上司であった女性幹部から、吉田氏への嫌疑が持ち上がった経緯についての説明があったのかもしれないが、途中参加の上祐氏は、そういった話を直接的には耳にしていない。事の成り行きがうまく把握できない状態のなか、麻原氏によって「ポア」が決定され、新實氏・中川氏が速やかに殺害を遂行、その後は村井氏によって粛々と遺体が処理されたというのが、上祐氏の証言から浮かび上がる事件の推移である。

こうしたプロセスを振り返ってみて疑問に思われるのは、上祐氏は一体何のために呼び出されたのか、ということである。吉田氏の事件は、教祖自身の立ち会いのもと、一人の信者を理不尽な仕方で殺害するというものであったわけだから、常識的に判断すれば、直接的な実行者以外は関与させたくないと考えるのが自然であるように感じられるからである。

遺憾ながらこの件については、もはや正確なことを確かめようがなく、判明している事実から推測を巡らせることしかできない。ともあれ、現時点で考えられる限りもっとも蓋然性が高いと思われるのは、以下のようなことである。すなわち、会合の途中で吉田氏を「ポア」することを決意した麻原氏は、その現場に上祐氏を立ち合わせよう、それによって彼に、教団の「裏の顔」、あるいは「本当の顔」を見せておこう、と思い付いたのではないだろうか。

同事件の経緯から看取されるのは、状況を正確に把握できないまま現場に呼び出された上祐氏が激しく動揺し、精神的かつ身体的に凍り付いてしまったのに対して、新實氏や中川氏、そして村井氏といった他の男性幹部たちが、あたかもすべてを了解しているかのようになり、手慣れた仕方で「ポア」を進めるという、きわめて対照的な構図である。

麻原氏は、高弟の一人として教団の「表看板」の役割を果たすことが多かった上祐氏に対し、「裏の顔」を見せつけることを思い立った。すなわち裏の顔とは、教団内には、「極秘のワーク」に携わる特別な人々がいる、そのワークには、同じ信者であろうと躊躇なくポアすることが含まれる、ということである。

周知のようにオウム真理教は、麻原氏に徹底して帰依することによって深い合一を果たし、それに基づいて手段を選ばずに行う究極的な救済方法を、「ヴァジラヤーナ（金剛乗）」と称していた。また、ヴァジラヤーナ活動は概して秘密裏に行われたが、そうした秘密にどこまで通じているかについては、各信者によって大きな違いがあった。本稿では、ヴァジラヤーナの秘密のなかでも、その深奥に通じた特別な信者たちを「ヴァジラヤーナの一群」と仮称し、考察を進めてみたいと思う。

2. 「ヴァジラヤーナの一群」の形成と役割

教団の隠された中核構造

オウム真理教の教団構成において、「ステージ」という考え方が主要な役割を果たしていたことは、比較的良く知られている。すなわち、グルである麻原氏が、各信者の修行の進み具合から「霊性の高さ」を判断し、地位や格付けを決定するというものである。こうした「ステージ」を前提としながら、「尊師—正大師—正悟師」といった階級制や、「神聖法皇—大臣—次官」といった省庁制などが作り上げられたのである。

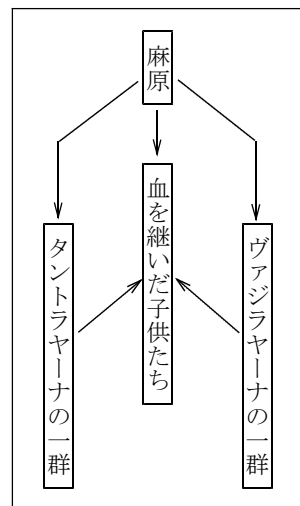
しかしながら、オウム時代に中堅幹部の立場にあった宗形氏によれば、こういった諸制度は多分に表向きのものであり、実際の教団においては、麻原氏とどれほど「近い」関係にあるかということによって、真の権力構造が築かれていたという⁽⁸⁾。その中心部分は、以下のように整理される。

まず、麻原氏と最も近い関係にあるのは、彼の血を受け継いだその子供たちである。彼らは生まれながらにして別格であり、すべての弟子たちを超えた地位にあると見なされた。また、女子よりも男子の方が重視され、妻が産んだ長男と次男、愛人が産んだ男子たちが、麻原氏に次ぐ地位に位置づけられた。妻や愛人が産んだ娘たちは、息子たちの下に置かれた。麻原氏は、「最終解脱者」である自らの遺伝子に神秘的な力が宿っているという観念を抱いており、そしてこれらの子供たちは、それをもっとも色濃く受け継いでいる存在と見なされたわけである。

次に弟子たちに関しては、男女によって扱いが大きく異なった。男性の弟子の場合、麻原氏と近い関係に置かれたのは、「ヴァジラヤーナ」活動に深く関与し、裏のワークや犯罪についての秘密を共有した者たちである。これに対して女性の弟子の場合には、「タントラヤーナ」と呼ばれる性愛の実践に従事した者たち、なかでも麻原氏の子供を産んだ女性たちが、特別な地位に置かれた。この論考では仮に、麻原氏に近い関係にあった男性の弟子たちを「ヴァジラヤーナの一群」、女性の弟子たちを「タントラヤーナの一群⁽⁹⁾」と称することにしたい。

オウム真理教における隠された中核構造を図式化すると、右のようになるだろう。頂点に位置するのは、言うまでもなく麻原氏であり、その下に、彼の血を継いだ子供たちが続く。弟子たちのなかで重要な位置にあり、隠然たる権力を有していたのは、「ヴァジラヤーナの一群」と「タントラヤーナの一群」に属する人々である。彼らは、位階制や省庁制においても高い地位に就いていることが多いが、必ずしも常にそうであるとは限らない。こうした弟子たちが、教団のさまざまな秘密の活動を担当し、麻原氏とその子供たちを精神的・肉体的に支えていたものと推定される。

念のために注記すれば、このような教団構造は、さまざまな機会に断片的な仕方而言及



(8) 宗形真紀子「オウム真理教と魔境——オウム真理教事件の原因と、霊的暴力からの解放についての考察」(『身心変容技法研究』第8号所収)、81-82頁を参照。

(9) 厳密に言えばこのグループには、女性信者のみならず、何人かの男性信者がサポート役として加わっていたように思われるが、本稿では詳しく論究しない。

されていたにせよ、完全な形で明示されていたというわけではまったくないし、これらのグループに属していた人々が、そうした自覚を明確に有していたとも限らない。とはいえ、特に麻原氏の意識のなかでは、自らの真の近親者や側近として、このようなグループ構造がイメージされていたのではないかと、また弟子たちの側でも、自分が麻原氏と特別な親密さで結ばれていることを実感する多くの機会があったのではないかと推測される。

「ヴァジラヤーナの一群」とは

「ヴァジラヤーナの一群」に関する考察を進めよう。宗形氏によればその存在は、麻原氏による一般信者向けの説法においても暗示されることがあった。その一例は、1990年4月13日、石垣島セミナーで行われたものである。そこには次のような言葉が見られる。

一つだけ言うておこう。君たちの知らないオウム真理教の部分があるということだ。それは君たちがちゃんとこのように修行できるように、その人たちは、日夜、どのようにしたら君たちが本当に修行ができるか、あるいは、多くの魂が修行できるかということを考えている一群があるということだ。そして、その人たちはヴァジラヤーナの道を歩かなきゃなんない⁽¹⁰⁾。

当時のオウムは、1990年2月の衆院選に敗北したことを切っ掛けに、ヴァジラヤーナ活動を本格化させていた。同年3月には、大規模な「ポア」を行うため、ボツリヌス菌を大量培養し、風船爆弾を用いてそれを世界中に散布する計画に着手している。そして4月10日に麻原氏は、計画を担う二〇数名の信者を第一サティアンに呼び出し、その趣旨を解き明かす説法を行った⁽¹¹⁾。ゆえに、上述の石垣島セミナーの説法において「ヴァジラヤーナの道」を歩く「一群」として想定されていたのは、こうした二〇数名のメンバーであったと考えるのが、もっとも自然であるのかもしれない。

とはいえ、より詳細に経緯を見渡すと、簡単にはそうと言いきることが分かる。というのは、彼らの大半は、計画の全体像を知らされないまま駆り出された実働部隊であり、その立案の時点から関与していたわけではないからである⁽¹²⁾。それでは、早期から計画に関与し、ヴァジラヤーナの「秘密」をより深く知っていた人々は、一体誰なのか。それを示した重要な記述は、以下の通りである。

選挙がすんでしばらくした九〇年三月初めごろ、私（注：早川）と新實、村井、遠藤誠一、中川はグル麻原とともに北海道に旅立ちました。その目的は、ボツリヌス菌を採取

(10) ひかりの輪のサイト「オウムの教訓」における「団体総括」1990年の記述 (<http://hikarinowa.net/kyokun/generalization1/revisionaum/1990.html>) を参照。

(11) 広瀬健一『悔悟——オウム真理教元信徒・広瀬健一の手記』（朝日新聞出版・2019）219-221頁を参照。

(12) 早川紀代秀氏は、『私にとってオウムとは何だったのか』122頁において、こうしたメンバーを「ヴァジラヤーナのサマナ」と呼び、石垣島セミナー前後からその人数が急増していった、と述べている。しかし逆に言えば、早川氏を含めその中核メンバーは、それ以前から存在していたわけである。

するためということでした。ボツリヌス菌は北海道の水辺付近の土の中にいるということで、そういう土を採取するためということでした。釧路市内の川辺で一度採取した後は、私と新實の二人が北海道を回って採取することになり、グル麻原と他のメンバーは富士に帰っていきました。

〔早川紀代秀＋川村邦光『私にとってオウムとは何だったのか』（ポプラ社・2005）164頁〕

ボツリヌス菌散布計画は、培養の基となる菌を採取することから始まったのだが、早川紀代秀氏が残した手記によれば、それに携わったのは、麻原氏の他、村井、新實、中川、早川、遠藤の五氏であった。これらの人々は、他の信者たちに先駆けて計画に参加しており、端的に言えば私はこの五名こそが、「ヴァジラヤーナの一群」を形成する中心的なメンバーであったと考えている。

「ヴァジラヤーナの一群」の形成過程

「ヴァジラヤーナの一群」は、多くの弟子たちのなかでも麻原氏と取りわけ親密な関係にあり、教団の秘密にも通曉していたと思われる。こうしたグループは、どのような仕方
で形成されたのだろうか。関連する事件を挙げながら、そのプロセスを簡略的に振り返ってみよう。

（1）真島事件

そのようなグループが形成され始める直接的な切っ掛けとなったのは、1988年9月に教団内で、信者の真島照之氏が死亡したことである。真島氏は、薬物中毒を治療するという目的から、富士総本部道場で行われた「極限の集中修行」に参加し、その最中、奇声を発して暴れ出した。彼は風呂場に連れて行かれ、頭を冷やすために水を掛けられたのだが、やがてぐったりとした状態になり、そのまま死亡してしまう⁽¹³⁾。そして、この出来事に立ち会った幹部たちと麻原氏は、事件の対処方法について話し合い、「救済計画が遅れる」という理由からこれを当局に届けず、遺体を内密に処分することを決定した。このとき麻原氏は、「これはヴァジラヤーナに入れというシヴァ神からの示唆^{つぶや}だな」と呟いたと伝えられている⁽¹⁴⁾。

このとき事件の隠蔽を図った人々が、その後も外部に公開できない数々の事件に関与したことは比較的広く知られており、私自身も以前にそれを指摘している⁽¹⁵⁾。とはいえ、今になって振り返るといささか認識が不足していたように思われるのは、麻原氏と幹部たちにとって真島事件は、必ずしも「偶発的に起こってしまった厄介事」として受け止められたわけではなく、より必然的で積極的な意味合いさえ帯びていたのかもしれない、という

(13) 真島事件については、これまで「死亡事故」と捉えるのが通説であったが、現在ではこれを「傷害致死事件」とする見解も出されている。ひかりの輪広報のサイト「(3) 男性在家信者死亡事件(真島事件)における新事実」の記述 (<http://hikarinowa.net/public-info/departure/cat249/3-1.html>) を参照。しかしここでは、その問題については深く掘り下げない。

(14) 早川紀代秀＋川村邦光『私にとってオウムとは何だったのか』130頁。

(15) 大田俊寛『オウム真理教の精神史』240頁。

ことである。その理由としては、次の二点が考えられる。

まず一点は、麻原氏と幹部たちは、このとき初めて「死のリアルな姿」に触れた、ということである。オウム真理教はまさに「死の魅惑」に取り憑かれた宗教であり、彼らは直接的にそれに触れる体験を渴望していた⁽¹⁶⁾。真島氏の死を目撃したことは、彼らのあいだに独特の興奮を呼び起こし、そうした欲求を満たすものとして受け止められた可能性がある。また、真島氏の死を公表せず、その魂を「ポア」したとして秘密裏に処理したことは、一般的な常識や法から決別することを意味し、麻原氏とそれに関与した幹部たちを、俗世間を超越した特別な絆で結びつける役割をも果たしたと思われる。

そして第二点は、当時の麻原氏は、ヴァジラヤーナの実践に踏み込むことを望み、そのタイミングを見計らっていたということである。真島事件から二ヶ月前の7月、麻原氏は弟子たちを引き連れてインドに向かい、チベット密教カギユ派の高僧であるカール・リンポチェのもとを訪れた。両者の面談は不調に終わったものの、麻原氏はそこで聞かされたヴァジラヤーナの教えに触発され、自分こそがそうした救済活動を行う宗教者であるという意を強くしている⁽¹⁷⁾。このような思いを抱いていた麻原氏にとって、目の前で信者の一人が死去し、「ポア」を試みる機会が与えられたことは、まさに「ヴァジラヤーナに入れという示唆」と受け止められたことだろう。

早川紀代秀氏は、抑制された筆致ではあるものの、真島事件の経験について次のように記している。

私は死体遺棄という犯罪に手を染めてしまったのですが、これは救済のためには正しいことなのだと思っていて疑いませんでした。そして、私が村井や岐部哲也、岡崎の四人で真島さんの遺体を護摩壇で焼却しているとき、「グルが真島さんを天界へポアした」という知らせが届いたのですが、この時は、本当によかったと思いました。「うらやましいな」とさえ思いました。〔早川紀代秀+川村邦光『私にとってオウムとは何だったのか』130頁〕

(2) 田口修二殺害事件

真島事件により、外部に公表できない秘密を抱え込んだことは、さらに重大な次の事件へと結びつく。出家信者であった田口修二氏の殺害事件である。

田口氏は麻原氏への帰依を失い、89年2月、教団から離れることを希望した。田口氏は真島事件を知る一人であったため、彼を下向させれば秘密が漏れるかもしれないと案じた麻原氏は、彼の「ポア」を決定する。その際の謀議に呼ばれたのは、村井秀夫、新實智光、岡崎一明、早川紀代秀、大内利裕、大内早苗の六氏であった。麻原氏は大内利裕氏に、「グルが人を殺せと言ったら殺せるか」と問い質し、彼は即座に「はい」と答える。そし

(16) 早坂武禮『オウムはなぜ暴走したか。——内側から見た光と闇の2200日』（ぶんか社・1998）92頁には、突然の事故で妻を失った筆者に対して、麻原氏が、「いいか、人間が死ぬところを目の前で見られたなんて、修行者として最高の経験ができたじゃないか。自由に生きてるつもりでも、実際は自分の人生さえコントロールできないのがよくわかったら」と言葉を掛ける場面が描かれている。

(17) 門田隆将『オウム死刑囚 魂の遍歴——井上嘉浩 すべての罪はわが身にあり』156-161頁を参照。

て、大内早苗氏を除く男性信者五名は、田口氏を閉じ込めていたコンテナに向かう⁽¹⁸⁾。

とはいえ大内利裕氏は、実際の殺害行為には参加しなかった。新實氏が大内氏を「大乘のタイプ」と見なし、ヴァジラヤーナには向かない、と判断したからである。大内氏はコンテナの外で見張り役を務め、他の四名が田口氏を殺害した。その際には最初、ロープで首を絞めたものの殺害できず、最終的には、新實氏が田口氏の首の骨を折ることによって絶命させた。その際の経験を、新實氏は裁判のなかで次のように供述している。

「当時の心境は。どんな意識だった？」弁護人が尋ねる。答えは神秘体験だった。「急激なエネルギーの交換が起こった。私の五年間にわたる修行の光のエネルギーが田口君に注がれ、(彼の)魔境の黒いエネルギーが自分の中に一気に入り込んだ。言葉では話せない」〔藤田庄市『宗教事件の内側——精神を呪縛される人びと』(岩波書店・2008) 223 頁〕

現状で知り得る限りでは、新實氏と村井氏がかなり積極的な態度で「ポア」に臨んだのに対して、岡崎氏と早川氏は、心理的抵抗を覚えながらも渋々同意する、といったスタンスであったように感じられる。ともあれこの事件により、麻原氏の意向に従い、たとえ仲間の子者であろうとも殺害に及ぶことを辞さない集団が形成された⁽¹⁹⁾。こうした経緯を振り返ると、「ヴァジラヤーナの一群」の原型的なメンバーは、田口氏の殺害を遂行した先述の四氏であったと考えられる。

(3) 坂本弁護士一家殺害事件

オウムは 89 年 8 月、翌年の衆院選に出馬することを決定した。それを切っ掛けに世間からも注目を集めるようになり、10 月からは、『サンデー毎日』による教団バッシングが始まっている。麻原氏は当初、毎日新聞社へのテロを口にしてしていたが、11 月 2 日深夜の会合において、標的を突然、「オウム真理教被害者の会」を設立していた坂本堤弁護士に変更する。その数日前に坂本弁護士との交渉が決裂しており、同氏こそが教団にとって今後の最大の障害になると見なされたからである。そして翌 3 日の深夜、坂本弁護士一家の殺害が遂行された。

教団外の人物を初めて殺害する機会であった同事件においては、先述の四名のほか、中川智正氏、端本悟氏の二名が実行役に加わった。すなわち、医者である中川氏は塩化カリウムの注射による殺害を、端本氏は空手の技を使って坂本弁護士を殴り倒すことを求められたのである。

この二名のなかで、一際特異な位置を占めるのが、中川智正氏である。氏は 88 年 2 月

(18) 早川紀代秀+川村邦光『私にとってオウムとは何だったのか』133-134 頁を参照。

(19) 森達也『A 3』「文庫のための新章 残像」には、麻原氏と一信者の次のような会話が記されている。「私は前世ではステージが高かったのに、ある生で失敗したっていつも(麻原から)言われていました。だからあるとき、「私は前世で何を失敗したんですか？」って訊いたんです。しばらく言葉を探するような感じで、それから「人を殺す恐怖に耐えられなかったんだよ」って言われました」(<https://note.mu/morit2y/n/n473ff71c6851>)。麻原氏の意識において、他人の生命を躊躇なく奪えるかどうか、信者の性質を判別する上での重要な基準の一つとなっていたことは疑いないだろう。

にオウムに入信し、89年8月末に出家した、この時点では新参の信者の一人であったが、麻原氏に早い段階で「帰依の深さ」を認められ、「ヴァジラヤーナの一群」の重要な一角を占めるようになる。11月2日深夜に行われた謀議においても、中川氏は、先の四氏に加えて、冒頭から参加を許されているのである⁽²⁰⁾。

なぜ中川氏は、特別扱いされたのか。それは、彼が「巫病」^{ふびょう}を発症していたことと関係していると考えられる⁽²¹⁾。現代精神医学の用語で言えば、「解離性障害」の一種となる⁽²²⁾。中川氏は、88年2月にオウムが開催した「竜宮の宴」というコンサート・イベントを観覧して以降、神秘的現象を頻繁に体験するようになり、日常生活を送ることさえ困難な状態に陥った。そのなかで、自分が前世から麻原氏の弟子であったことを確信し、出家を避けることはできないと思い詰めるようになる。後に見るように出家後の中川氏は、きわめて深いレベルで麻原氏との人格的合一を果たしていった。そして、医師としての技能をも用いながら、ヴァジラヤーナ活動に邁進したのである。

(4) ボツリヌス菌散布計画

先に見たように、オウムは「真理党」を結成して90年2月の衆院選に出馬したが、結果は惨敗であった。またその期間には、「ヴァジラヤーナの一群」のメンバーであったと推定される岡崎一明氏が、選挙資金を奪って教団から離脱するという事件を起こしている。岡崎氏は裁判においてその理由を、オウムが選挙において宗教色を表に出したことに疑問を抱いたためと語っているが、正確な事情は明らかではない⁽²³⁾。

これもすでに述べたように、オウムは選挙で敗北したことを切っ掛けに、本格的なヴァジラヤーナ路線に突き進んでいった。その際に麻原氏が重要視した人物は、帯広畜産大学と京都大学大学院で生物学を研究していた、遠藤誠一氏である。その頃のオウムは、生物兵器を用いた無差別テロを画策していたため、遠藤氏もまた、教団のヴァジラヤーナ活動を担う中核的なメンバーの一人に加えられていったと思われる。

各メンバーの人物像

以上のように、オウムにおける陰の中核組織である「ヴァジラヤーナの一群」は、真島事件が起こった88年9月から、ボツリヌス菌散布計画が始まる90年3月頃までのあいだに徐々に形を取ってゆき、その中心的なメンバーであったのは、村井秀夫・新實智光・中川智正・早川紀代秀・遠藤誠一の五氏であったと推定される。当然ながら、各人の性質や役割が一樣であったわけではなく、それぞれに特色がある。私自身の主観や推測をいくらかは交えざるを得ないが、各メンバーの人物像を簡潔に描写してみよう。

(20) これに対して端本悟氏は、岡崎氏の裁判証言によれば、謀議の場に「後から来た」とされている。毎日新聞社会部編『オウム「教祖」法廷全記録2』（現代書館・1997）10頁を参照。

(21) 藤田庄市『宗教事件の内側——精神を呪縛される人びと』261-267, 288頁を参照。

(22) NHKスペシャル取材班編『未解決事件 オウム真理教秘録』（文藝春秋・2013）290頁を参照。

(23) 佐木隆三『大義なきテロリスト——オウム法廷の16被告』（日本放送出版協会・2002）92頁。同書では、岡崎氏の教団離脱の背景には、女性幹部との確執があったとも記されている。

(1) 村井秀夫氏

大阪大学理学部修士課程を修了後、神戸製鋼に勤務した技術者であり、実直な努力家でもあった。とはいえ、多分に空想的な気質も備えており、オカルト的な科学を文字通りに実現しようと試み、失敗を繰り返した。しかしそういった点も、誇大妄想の傾向が見られた麻原氏と相性の良い点であったように思われる。

村井氏は明らかに、「ヴァジラヤーナの一群」の筆頭に位置した人物である。麻原氏はあるとき、「教団のすべてを知っているのは、自分とマンジュシュリーだけだからね」と漏らしたと言われている⁽²⁴⁾。イエスマンとしての性質が顕著であり、麻原氏からの要求を拒むということがなかった。地下鉄サリン事件を含め、教団が起こした多くの事件は、麻原氏の要求を受けて村井氏が考案・具体化したものであったと推測される。教団内の人物を粛清する際にも、村井氏はほとんど反対することがなく、特に遺体の処理を積極的に請け負った。オウム事件に多くの不明点が残った主な原因の一つは、村井氏がほとんど何の証言も残さず95年4月に刺殺されたためであると言わざるを得ない。

(2) 新實智光氏

愛知学院大学法学部を卒業後、健康食品会社の営業部門に勤務。その最中に自動車事故を二度起こしたことを「魔境」に陥ったためと捉え、オウムに出家した。

本来は明るく真面目な性格であったが、神秘的な現象や体験を過剰に重視するところがあり、オウムの修行に人一倍のめり込んでいった。なかでも「ポア」の教義を誰よりも深く信じ込み、先に触れた田口修二殺害事件の供述に見られるように、自らの手で人を殺害することに恍惚感を覚えていた形跡がある⁽²⁵⁾。彼は外部者の殺害のみならず、教団内の人間に対する暴力や粛清においても、主導的な役割を果たした。

(3) 中川智正氏

京都府立医科大学医学部を卒業し、医師国家資格を取得。もともとは温厚で活発な人柄であり、彼を慕う友人も多かった。しかし先述のように、中川氏の人生は、オウムのコンサート・イベントを観覧したことから大きく一変する。それを切っ掛けに数々の神秘的現象を体験するようになり、オウムに出家する以外に道はないと思い込んでしまうのである。

中川氏に関するさまざまな証言を読む限り、彼の精神は、解離性障害が充進することによって多重人格化し、その一部が麻原氏と合一化していたようにさえ思われる。一例を挙

(24) 上祐史浩『オウム事件 17年目の告白』111頁。「マンジュシュリー」は村井氏のホーリーネーム。

(25) デーヴ・グロスマン『戦争における「人殺し」の心理学』(ちくま学芸文庫・2004)は、人が殺害を行う際に経験する心理を克明に描いた、類い希な書物である。そのなかでは、近距離で人を殺す際の心理が次のように描写されている。「近距離の場合、ほんのつかのまのことであり、口に出されることは少ないが、やはりたいていの兵士はなんらかの形で多幸福感の段階を経験するようだ。私が直接調査した戦闘体験者は、とくに質問すればだが、敵を殺すのに成功したときつかのま高揚感を体験したと認めている。この多幸福感の段階は、ふつうほとんど間をおかずに罪悪感の段階に飲み込まれてしまう」(204頁)。こうした強烈な多幸福感と罪悪感の波を堪え忍ぶために、新實氏は「ポア」の教えに没頭していったのかもしれない。

げれば、次のような供述はきわめて印象的である。

麻原の想念が中川に入る現象については、控訴審で元信徒たちから幾つもの証言がなされた。林泰男は語った。一九九五年四月末か五月初め、新宿青酸ガス事件（殺害未遂）の謀議中のことだ。麻原はその場にはおらず、中川はブルブル震えて怯えながら「これ以上、悪業になることはやれない」と涙を流していた。ところが平田悟（V X 殺害・殺害未遂事件などの犯人）が部屋に入ってきて、中川に対し、「尊師（麻原）を意識して」と元気づけるや、彼は突然、「これから頑張る」と元気になった。その急変さは尋常ではなく、「恐ろしい感じがした。豹変ぶりは。一瞬のうちに別の人格に変わってしまったようでした。それまで長く話して心を見せあっていたのに、中川さんの中に麻原が怪物か魔物のように取り憑いているのを感じて怖い感じがしました」

〔藤田庄市『宗教事件の内側——精神を呪縛される人びと』285-286頁〕

人格が交替した状態の中川氏は、麻原氏からの指示を躊躇なく遂行した。塩化カリウムの注射によって複数の殺人事件に関与するほか、薬物が頻繁に使用されるようになった後期のオウム教団においては、各種の人体実験から兵器開発に至るまで、数多くの役割を担ったのである⁽²⁶⁾。また彼は、麻原氏の主治医を務めており、省庁制導入以降は「法皇内庁長官」の地位を与えられた。そのため、本稿において「タントラヤーナの一群」と呼ぶ人々の世話役をも兼ねていたと推定される。中川氏は、医師としての職能とその精神状態ゆえに、教団の秘密にもっとも通暁する一人になっていったのである。

（４）早川紀代秀氏

神戸大学農学部を卒業、大阪府立大学大学院緑地計画工学コース修士課程を修了後、鴻池組や日本リサーチ研究所などに勤務する。86年4月に「オウム神仙の会」に入会、87年11月に出家した古参信者の一人であった。麻原氏より六歳年長であり、社会経験も豊富であったため、教団では実務面の責任者を務めることが多かった。

彼は、真島事件に立ち会ったこと、田口修二殺害事件の実行役の一人となったことにより、「ヴァジラヤーナの一群」の一角を占めるようになる。富士山総本部のサティアン群、熊本県波野村のシャンバラ精舎の建設など、教団のインフラを整備する仕事を担い、その背後で秘密裏に武装化計画を推進していった。91年末からはロシアとの結びつきを強め、兵器や薬物の原料輸入、製造方法の調査を手掛けている。

彼が残した手記である『私にとってオウムとは何だったのか』を読む限りでは、麻原氏に対して揺るぎない信仰心を持ち続けたというよりも、常にどこかで懐疑的な姿勢を示し、非合法活動、なかでも他者を傷つける行為に対しては、慎重かつ消極的であったという印象を受ける。とはいえ、律儀な性格や面倒見の良さから、なかなか麻原氏の指示を断り切れず、少しずつ深みに嵌まっていった様子が窺える。

(26) 宗形真紀子氏もまた、1993年秋頃から二～三ヶ月間、中川氏による薬物実験の対象者となっている。宗形真紀子「オウム真理教と魔境」83頁を参照。

(5) 遠藤誠一氏

帯広畜産大学畜産学部研究科修士課程を修了後、京都大学大学院医学研究科博士課程に進学し、遺伝子工学・ウィルス学を専攻した。繊細で内気な部分があったものの、基本的には明朗かつ社交的な性格であった。彼は研究生活のなかで、物質的次元に着目するだけでは生命の本質を捉えることができないと考え始め、精神世界やニューサイエンスの分野に関心を抱くようになる。

そうした経緯から、87年3月にオウム神仙の会に入会。88年5月、教団から、麻原氏のDNAやリンパ球を培養することを依頼される。それらを飲むと生命エネルギーが上昇すると謳われ、「愛のイニシエーション」や「シークレットイニシエーション」に用いられた。遠藤氏自身はその効果に懐疑的であったが、気弱な性格から反論することができなかったという⁽²⁷⁾。先述したように麻原氏は、自らの遺伝子に神秘的な力が宿っているという信念を強固に抱いており、そうした見地からも、それらを培養する技術を有する遠藤氏の特別視が始まったのではないかと考えられる。

遠藤氏は、88年11月に出家した直後から、教団内に生物研究を行うための施設を与えられた。衆院選の敗北によってヴァジラヤーナ活動が本格化した後は、ボツリヌス菌や炭疽菌など、もっぱら生物兵器の開発を手掛けている。とはいえ、彼の手掛けた生物兵器はほとんど毒性を備えておらず、その間は、オウムのテロ行為も表面化することがなかった。しかし93年、土谷正美氏がサリンやVXを始めとする化学兵器の開発に着手し、次々とそれに成功すると、状況が大きく変化する。当時の遠藤氏と土谷氏のあいだには、激しいライバル関係が生じたことで知られるが、その背景には、遠藤氏が麻原氏と特別に「近い」関係にあり、土谷氏がいかに功績を挙げようともそこに割って入ることができなかった、という事情が存在していたのかもしれない。

「ヴァジラヤーナの一群」の外縁に位置した幹部——井上嘉浩氏

以上が、「ヴァジラヤーナの一群」に属していたと推定される各メンバーの簡単なプロフィールである。続いて、これまではオウムにおけるヴァジラヤーナ活動の中核を担っていたと考えられてきたものの、実際にはそうではなかった人物について触れておきたい。それは、井上嘉浩氏である。

先に述べたように私は、女性信者殺害事件の捉え方を巡って宗形氏と対話を重ねたが、その結果ようやく分かってきたのは、教団においては、どれだけ修行が進んでいるか、宗教者としてどれだけ能力があるか、ということとは別に、麻原氏にどこまで深く帰依しているか、常識的な一線を越え、ヴァジラヤーナやタントラーナといった秘密の活動にどこまで積極的に荷担できるかということに依拠して、隠れた序列が設けられていた、ということである。例えば上祐史浩氏について言えば、彼は表面上は「正大師」という弟子のなかでも最高位にあったが、しばしば麻原氏の方針に異を唱え、ヴァジラヤーナ活動にも積極的ではなかったため、「真の序列」における地位は決して高くなかった。こうした観点から考えると、上祐氏が吉田英子氏の殺害現場に呼び出されたのは、教団の「真の序列」を暗に見せつけるため、さらには、麻原氏の方針に異を唱え続けるようであればどうなる

(27) 佐木隆三『大義なきテロリスト——オウム法廷の16被告』353-356頁を参照。

かを知らしめるためであったのではないかと、私には思われるのである。

2018年の死刑執行後、詳細が公表されたもう一つの事柄として、井上嘉浩氏が獄中で徹底したオウム総括を進め、原稿用紙五千枚に上る手記を残していたということがある。ジャーナリストの門田隆将氏は、こうした手記に綿密な取材を加え、同年12月、『オウム死刑囚 魂の遍歴——井上嘉浩 すべての罪はわが身にあり』（PHP研究所）という評伝を公刊した。私も早速一読したが、そこから受けた印象は、井上氏についての従来のイメージを少なからず覆すものであった。

彼の所属していた「諜報省」は、オウムの組織のなかでも、多くの犯罪を手掛けた部署として悪名が高かった。また井上氏も、何とか死刑を回避したいという動機から、裁判において自身に有利となるような証言を重ねたのではないかという世評が一般的であった。それに対して同書は、一人の公安警察官が発した、「いざというときに、井上は殺人から“逃げている”⁽²⁸⁾」という言葉を中心に展開されている。氏の行跡を丹念に辿り直すことによって浮かび上がってくるのは、彼が必ずしも心から麻原氏に帰依し、積極的にヴァジラヤーナ活動に従事していたわけではなかったこと、むしろしばしばその弱腰な姿勢を非難され、苛烈な脅迫や暴力に晒されていたということである⁽²⁹⁾。

2018年の末に『オウム死刑囚 魂の遍歴』が公刊された頃には、私にはすでにある程度「ヴァジラヤーナの一群」や「タントラヤーナの一群」に関する仮説が念頭にあったため、必然的に同書を、そうした観点から読むことになった。その結果、私を感じたのは、井上氏は「ヴァジラヤーナの一群」のきわめて近傍に位置しながらも、そのメンバーからは外れていた、ということであった。

言うまでもなく彼もまた、麻原氏への信仰心を少なからず保持していたため、基本的には、「真の側近」として認められたいという願望を抱いていた。とはいえ井上氏は同時に、自分自身の力で宗教的^{つか}真実を掴みたいという気持ちや、直接的に人を傷つけることに対する抵抗感を持っていたことから、陰の中核組織である「ヴァジラヤーナの一群」のメンバーとして認められることはなかった。オウムの幹部のなかでも、井上氏ほど周囲からの評価が分かれる人物も珍しいが、それは彼が、「ヴァジラヤーナの一群」の外縁という特殊な位置に置かれたためではなかったか、と推測される。

井上氏が著した手記の一部はネットでも公開されており、そこで彼は、教団の構造について次のように述べている。

教団の組織的活動には三層構造がありました。第一は麻原のレベル。第二は麻原がその度に示す教義や活動方針を出家者、在家を含む教団全体に浸透させるシステムの構築やその運用を統括したり、武力革命のためには様々な準備を麻原と共に企画・立案し、推進したりした者たちのレベル。第三は、決定された方針や指示を現場で実施する者た

(28) 門田隆将『オウム死刑囚 魂の遍歴』15頁。

(29) 門田隆将『オウム死刑囚 魂の遍歴』に記載されている限りでは、井上氏は少なくとも二度、生命を脅かされるレベルの暴力を受けている。すなわち、89年8月のコンテナへの四日間の監禁（213頁以下）、94年6月のLSD大量投与（264頁以下）である。また同書からは、態度を改めないようであれば家族ごとポアするといった脅迫を幾度も受けていたことが窺われる。

ちです。

オウム事件では麻原と現場で事件に直接関与した信者は刑事責任を問われました。麻原から現場の指示に下りてくるまでの間、第二レベルの信者らは麻原といろいろと相談している形跡がありますが、麻原も彼らも供述自体を拒否することで、彼らは刑事責任すら問われていません。

地下鉄サリン事件においても、リムジン後、実行役に指示があるまでの空白の5時間や、犯行声明文など、本当の謀議や犯行の動機、目的が、麻原と彼らが供述を拒否することで、肝心のところが中抜けの状態となり、(まるで彼らの供述がなかったかのよう)に事件構図自体に反映されず、未解決のままとなっています⁽³⁰⁾。

ここで井上氏は、教団に「三層構造」が存在していたことを指摘している。そのなかでもっとも注目しなければならないのは、「第一レベル」の麻原氏、「第三レベル」の実行部隊に挟まれた、「第二レベル」の存在である。井上氏はそれを、武力革命のためのさまざまな準備を麻原氏と共に企画・立案し、推進した者たちのレベル、と規定している。

多くの人々はこれまで、井上氏こそがそうした役割を担った人物であると捉えていたが、彼の手記によれば、事実はそうではなかった。彼は言わば、「第三レベル」の責任者に位置する存在であり、本稿で「ヴァジラヤーナの一群」や「タントラヤーナの一群」と呼んできたような、「第二レベル」のグループには属していなかったと推測されるのである。

一連のオウム裁判においては、「リムジン謀議」を始め、教団の内情を積極的に暴露しようとする井上氏と、それを否認しようとする麻原氏と取り巻きの幹部たち、という対立の構図が見られた。その背景には、これまではっきりと認識されてこなかった教団内部の構造や、信者間の微妙な位置関係が存在していたと考えられる。

3. 精神呪縛の構造

「思想・依存・秘密・恐怖」の緊密な結合

本稿では、オウム真理教に隠された中核組織が存在していたという仮説に基づき、考察を進めてきた。その探求の過程で私が改めて痛感させられたのは、オウムはこうした構造ゆえに強靱な求心力を獲得し、信者たちの精神を呪縛していた、ということである。

オウムにおける精神呪縛の手法に関しては、これまで主に、社会心理学に基づく「マインド・コントロール」論が提唱されてきた。とはいえ、すでに別稿で詳しく論じたように⁽³¹⁾、同論は本質的に疑似科学の一種であり、「カルト」の実質解明に寄与したというよりも、むしろそれを生み出す原因となった幻想の一つと見なさざるを得ない。

しかしながら他方、オウムにいったん足を踏み入れた人々が、教祖である麻原氏を含め、

(30)井上嘉浩「未来の世代へ 二度と過ちが繰り返されないように」(七)「予言」(<http://www17.plala.or.jp/compassion/shuki.html>)より引用。

(31)大田俊寛「社会心理学の「精神操作」幻想——グループ・ダイナミクスからマインド・コントロールへ」(『身心変容技法研究』第8号所収)を参照。PDFファイルが以下で公開されている(<http://wa-za-sophia.la.coocan.jp/>)。

そこから抜け出し難くなる構造が存在していたということも、疑い得ない事実である。果たしてそれは、どのようなものだったのだろうか。ここで再び考え直してみよう。

現状において私は、オウムにおける精神呪縛の構造を、大枠として下図のようなものであったと捉えている。各要素の概略は、以下の通りである。

$$\text{精神呪縛} = \frac{\text{依存} + \text{秘密} + \text{恐怖}}{\text{思想}}$$

(1) 思想

オウムについて分析する際にもっとも重視しなければならないのは、やはり「思想」である。図で示したように、それは分母に位置する存在であり、オウムにおけるすべての行動の基礎となり、教団の全体や各信者の心理に至るまで、広範な影響を及ぼしている。

オウムの思想について私は、『オウム真理教の精神史』のほか、『現代オカルトの根源——靈性進化論の光と闇』(ちくま新書・2013)という著作で分析を行っているが、それを一言で表すなら、「靈性進化論」という概念に集約される。現代社会は、「死」に対する公的な説明が欠如しているという、歴史的に見ても特殊な状況を抱えている。そして一部の人は、「生きる意味」や「死の実相」を探し求め、その挙げ句に、靈性進化論というオカルト思想に逢着する。それによれば人間の靈魂は、輪廻転生を繰り返しながら進化を続け、神的存在に近づいてゆく。他方、靈性に目を向けずに物欲に溺れる人々は、動物的存在に墮してしまふ。靈性進化論の何よりの特徴は、「靈的存在」と「動物的存在」という二元論にある⁽³²⁾。

その思想は、オウムの教義においても根幹的な位置を占めていた。教祖の麻原氏は、靈性進化をいち早く達成した神的存在と見なされ、他の弟子たちは、彼に帰依することによって自らも進化を遂げることを望んでいた。オウムの最終的な目的は、人類の支配的な種族を「動物的種族」から「靈的種族」に入れ替えること(「種入れ替え」)、ひいては、超人類から成る「シャンバラ」というユートピアを建設することに置かれていた。そして麻原氏は、その目標を達成するため、魂の行方をコントロールする「ポア」という技法を用いると見なされたのである。

こうした世界観は、オウムに入信した後の思想教育によっても強化されたが、基本的には、それ以前の自己学習によってすでに身に付けられていた、と見なければならない。なぜなら靈性進化論は、当時流行していたニューエイジやスピリチュアル系の思想における中心的要素の一つであり、部分的にはアカデミズムにも取り入れられていたからである。オウム信者が教団崩壊後もその思想からなかなか離れることができなかったのは、「マインド・コントロール」が強力に機能していたためではなく、長い時間を掛けてそれを自己の力で習得していたためと捉えるのが自然だろう。

(2) 依存

「思想」が分母に位置し、外部から全体へと影響を及ぼすのに対して、分子に位置する

(32) 靈性進化論に見られる二元論については、大田俊寛『現代オカルトの根源』7-19頁を参照。また、「高橋克也被告裁判・証言草稿——地下鉄サリン事件 20年に際して」(<https://synodos.jp/society/13412>)という論考でも、その概略を説明している。

のは、「依存・秘密・恐怖」の三要素である。これらは、教団内部の組織構造や人間関係の形成論理に深く関係している。

まず一つ目は、「依存」である。オウムのみならず、カルト的な団体に接近する人々は、それ以前の社会生活において、個としての自己を確立することに困難を抱え、^{さくぼく} 索漠とした孤独に晒されることにより、他者との密接な関係を希求していることが多い。そしてしばしば、カリスマ的な力を持つと見なされる教団の中心人物に、自ら深く依存してゆくのである。

さらにオウムにおいては、自我に基づいて思考することが、「観念」「エゴ」「我欲」の現れとして否定的に評価され、それらを捨て去り、グルである麻原氏に深く「帰依」することが、霊的進化を遂げるために不可欠の方法と見なされた。特にヴァジラヤーナの実践においては、「自己を空っぽ」にし、そこに「グルのエネルギーをなみなみと満ち溢れさせる」こと、「グルのクローン化」を行うことが求められたのである。

しかしながら、帰依と言えは聞こえは良いが、実際にオウムで行われたのは、現実や常識から目を背け、師と弟子相互の共依存的な合一化を果たし、空想的な閉鎖世界に没入するということであった。そして本稿で述べたように、オウムにおいては、麻原氏とどれだけ深い依存関係にあるかということによって、弟子たちのあいだに密かな序列が設けられていたのである。

(3) 秘密

二つ目の要素は、「秘密」である。オウムの思考回路の基調を為し、その求心力の源泉となっていたのは、世界にはある重要な秘密が隠されており、それを知ることによって大きな力を得ることができる、さらには、究極的な救済に^{あずか} さえ与ることができるという観念であった。そもそも「オカルト」という言葉は、「隠されたもの」を意味するラテン語に由来するが、霊性進化論はまさに、世界の秘密の解き明かすためのオカルト思想として登場した。そして麻原氏は、世界の秘密、生と死の秘密^{ちしつ} を知悉した人物として自己演出し、多くの信者たちを引き寄せたのである。

ところがそうした秘密主義は、教団内において次第に歪んだ様相を呈するようになる。先述したように霊性進化論の骨格は、将来の人類が「霊的種族」と「動物的種族」に分かたれるという二元論にあるが、その世界観に基づいたオウムの実践は、究極的には、最終解脱者の遺伝子を継承・増殖させるために多くの女性たちと性関係を結ぶこと⁽³³⁾、さらには、教団の活動を妨げる人間を「ポア」の名の下に次々と粛清することに帰結していった

(33) 『週刊ポスト』2000年3月17日号「麻原彰晃が耽っていた愛妾10人との「クスリ乱交」秘儀」という記事には、オウム元幹部の告白として、次のような言葉が見られる。「麻原がなぜそこまで処女にこだわるかといえば、「五仏」に関係があります。五仏とは、ハルマゲドンから人類を救済する際、麻原を手助けする5人の仏のことで、「自分が女性信者に生ませた男子が五仏になる」、と麻原は説明していました。このため、何とかして男児を5人作る必要があると、愛人作りに励んだわけです。その際、「処女は汚れていないから、修行者として最高の状態にあり、五仏を生むのにふさわしい女性である」と、麻原は我々に説いていました」。この発言を文字通りに受け止めれば、ハルマゲドン後に作られるユートピアの指導者層を生み出すために、「タントラヤーナの修行」が実践されていたということになる。

からである。

こうした行為はそれぞれ、「タントラーナーの修行」、「ヴァジラーナーの救済」と称され、その内容を外部に漏らすことは、厳密に禁じられた。不可避免的にその従事者たちのグループは、「タントラーナーの一群」「ヴァジラーナーの一群」として、「教団内秘密結社」と呼ぶべき性質を帯びるようになる。そしてこうした存在は、そこに入ることができない周囲の信者たちからすれば、「グルと特別な絆で結ばれたメンバーがいるらしい」という形でしばしば暗示され、自分自身もより深くグルに帰依しなければならない、という動機をも形成したと考えられる。

(4) 恐怖

三つ目の要素は、「恐怖」である。先に挙げた「秘密」という要素は、教団内に独特の結束力や求心力をもたらすが、それは当然ながら、長期にわたって持続可能なものではない。秘密が外部に漏れることを恐れる心理がエスカレートし、それを封じ込めるために、脅迫や暴力が横行するようになっていったからである。

本稿で見てきたように、そもそもオウムにおいてヴァジラーナーの活動が開始されたのは、真島氏の死を隠蔽するという秘密を抱え込んだことが端緒となっていた。さらに、それが漏洩することを防ぐために、田口氏の殺害が行われたのである。その後も教団内では、「スパイ」が入り込んで秘密を探ろうとしているという被害妄想的な恐怖感が加速度的に強まってゆき、後期におけるオウムの修行は、麻原氏への帰依の深さを試しながら、同時に「スパイ」や「裏切り者」を炙り出すという性質のものに成り果てていった。そして多くの信者に対しては、グルに背けば来世は無間地獄に落ちるといった精神的恐怖が刷り込まれる一方、一部の信者や幹部に対しては、さまざまな物理的暴力が行使されるほか、裏切りを働けば実際に「ポア」する可能性さえある、という脅迫が頻繁に加えられたのである。オウムを暴走させるもっとも強い要因となったのは、疑心暗鬼の蔓延によって恐怖が増幅していったこと、さらには、仲間であろうとも躊躇なく「ポア」を遂行できる一群が存在したことであった、と考えられる。

教団の内部構造への考察が不足した理由

政治哲学者のハナ・アーレントは、ナチズムやスターリニズムを分析した著作『全体主義の起原』において、全体主義的体制に見られる重要な特性として「秘密警察」の存在を挙げている。すなわち全体主義においては、その理不尽な体制を維持・強化するために、内部の反逆者や不満分子を執拗に洗い出し、拷問・粛清を手掛ける秘密の組織が著しく発達するのである⁽³⁴⁾。

私自身は『オウム真理教の精神史』において、オウムが「全体主義カルト」の一つであったという観点から分析を行っている。それゆえ本来であれば、オウムの内部においてそうした組織が存在する可能性について早めに察知し、具体的な探求を行ってしかるべきであった。とはいえ、実際に私が、教団の内情把握に関して大きな欠落があることに気づいたのは、先述したように、昨年7月の死刑執行後、女性信者殺害事件について宗形氏と議

(34) ハナ・アーレント『全体主義の起原』第三巻（みすず書房・1974）、192頁以下を参照。

論を交わすことによって、そして、井上氏を始めとする当事者たちが残した手記を読むことによってであった。私の専門はあくまで宗教思想史であるため、教団内の具体的な人間関係にまで踏み込むことは厳密に言えば守備範囲を外れていたことは事実だが、大きな見落としがあった点については、率直に自らの不明を恥じたい。

しかし他方、どうしても不思議に思われるのは、オウム内の人間関係をある程度丁寧に辿ってゆけば当然気づくはずであったこうした事柄が、なぜこれまで明確に指摘されてこなかったのか、ということである。その理由は私には定かではないが、推測される内情を「教団側の問題」と「捜査上の問題」に分けて述べれば、以下のようになる。

(1) 教団側の問題

今回の考察において私が改めて認識したことは、麻原氏の真の「側近中の側近」であり、「ヴァジラヤーナの一群」の筆頭に位置づけられる人物は、村井秀夫氏であったということである。村井氏の特徴は、現実には到底不可能なことを科学の力で達成しようとする空想傾向が見られたこと、グルに対する徹底した帰依の姿勢を示したことにあったが、彼が側近として仕えたことにより、麻原氏が抱いた数々の誇大妄想的計画が実行に移された。先にも述べたとおり、村井氏こそが教団の内情を誰よりも深く把握していた人物であっただろう⁽³⁵⁾。とはいえ、彼が逮捕されずに刺殺されることにより、その多くは知られないままとなってしまった。

また麻原氏は、一審の裁判が始まって間もなく、証人出廷した井上嘉浩氏から教団の内情を暴露されることで精神の均衡を失い、まともな証言を行えない状態に追いやられた。絶え間ない暴力と脅迫によって井上氏の精神を完全に制圧していると思込んでいた麻原氏にとって、彼が早期に信仰から脱却し、自身への反抗の姿勢を示したことは、耐えがたいほどの衝撃と自信喪失をもたらしたのかもしれない。ともあれ結果として、麻原氏が教団の内情について具体的に語る機会は失われた。

「ヴァジラヤーナの一群」や「タントラヤーナの一群」に属する人々で、まとまった手記を残したのは、早川紀代秀氏のみであった。今になって振り返ると、その点で早川氏の手記の存在は大変貴重だが、しかし同時に、かなり簡略的な記述に留まっているという印象も拭えない^{ぬぐ}。こうした人々が踏み込んだ手記を公表しなかったのは、オウムや麻原氏に対する信仰心が何らかの形で残存し続けたこと、過分な責任を負いたくないという忌避感が働いたこと、内情があまりに特殊であるため、とても平明には説明できないと考えたことなどがあっただろうが、それ以上に彼らにとっても、教団の中核組織の構造が詳らかに^{つまび}には理解できなかったためではないか、と思われる。

(2) 捜査上の問題

(35) 村井氏のことを考えるとき、私にはどうしても、ナチスの幹部であったハインリヒ・ヒムラーと重なって見えてしまう。ヒムラーは温厚で実直な人柄であったが、同時に、ヒトラーに対する帰依の態度を誰よりも深く示した人物であった。そのため、ヒトラーにもっとも近い組織である親衛隊の長を任せられ、特に「レーム肅清」という事件を切っ掛けとして、ナチスの秘密任務を請け負う陰の権力者の地位を確立してゆく。谷喬夫『ヒムラーとヒトラー——氷のユートピア』(講談社選書メチエ・2000)を参照。

オウムに対する捜査に関して、最大の問題として指摘しなければならないのは、教団内の事件や事故が本格的には調べられず、その大半が立件もされなかった、ということである。一説によればオウム内には、把握された限りでも、十八人の死因不明者、十人の生死不明者が存在している⁽³⁶⁾。吉田英子氏を含め、これらの人々は、「スパイ」疑惑を掛けられて密かに殺害された、あるいは、危険な修行に追い込まれて命を落とした可能性が高い。また死亡事件以外にも、教団内で起こった暴力・脅迫・性的暴行などは、可能な限り綿密に捜査して立件するべきであったが、遺憾ながら、それらはほぼすべて断念されてしまった。こうした捜査が着実に行われていれば、教団内において暴力や脅迫を行使する側にいた者と、行使される側にいた者が区別され、その人間関係の特殊性がより明らかになっていたことだろう。

とはいえ、捜査側が当時直面した状況を^{かえり}顧みるならば、そうした行為を断念せざるを得なかった理由も、十分に理解される。というのは、まず第一に、教団内の事件や事故は、おそらくは調べれば調べるほど膨大な量に上り、それらをすべて捜査・立件・裁判することになれば、オウム事件は事実上終わりが見えないものになっただろうからである。加えて教団内の事件は、捜査側の目から見れば、果たして外部から行使された「暴力」なのか、本人が進んで身を投じた「修行」なのかが、きわめて判別しにくい。そして「被害者」に当たる信者に話を聞いても、自分の受けた行為が何だったのか、本人でもその意図がよく理解できず、とにかく今は過去の傷に触れてほしくないと訴える者もいたのではないかと推測される。

オウム事件は、日本社会にとって歴史的にも稀なほど巨大かつ複雑なものであり、それに関する捜査が完全には行われなかったとしても、やむを得なかった側面が多分にある。しかし、他方でわれわれは、裁判を通して詳細に審議されたのは、その大半が教団外の事件に関してのみであり、教団内の事件は依然として多くが闇に包まれていることを自覚しておく必要があるだろう。

*

最後に再び繰り返せば、以上の考察は、オウム研究に遅れて参与した外部観察者に過ぎない私が、当事者の一人であった宗形真紀子氏に事情を聞きながら、推測を重ねて組み上げていった「仮説」の一つに他ならない。現状において私は、この推察はそれほど実態から外れていないのではないかと、思っているが、その他の当事者が考察に加われば、自ずと異なる像を結ぶ可能性が高いことも否定できない。ともあれ今は、あまりにも遅延してしまっただけとはいえ、これからもオウム事件についての反省が着実に進展すること、ひいてはそれを通じて、日本社会が各種の宗教問題に臨む際の態度が一層成熟することを、心から願う。

(36) 『週刊ポスト』2000年3月31日号「麻原彰晃「愛欲リンチ殺人」初めて明かされた真相」を参照。